

# R . H . ブライス研究

## 禅と英文学

川田基生

日本大学大学院総合社会情報研究科

## Zen and English Literature

— A Study of R. H. Blyth —

KAWATA Motoo

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

Dr. Reginald Horace Blyth (1898-1964) is well known as an introducer of Haiku to Europe and America. He studied Zen Buddhism in Korea under the influence of Suzuki Daisetz. In this paper, I have investigated his view of Zen expounded in his work; *ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS*, 1942. This book is filled with deep insights and delightful comprehensions of Zen. He says that “The life of Zen is the God-kissed life.” For him, Zen and poetry are practically synonyms. Being free from Asian way of understanding, R. H. Blyth has formulated an innovative idea of Zen.

### 序

この論考はR . H . ブライス、(Reginald Horace Blyth ,1898-1964) の芸術観と境涯についての一考察である。

本稿の特色のひとつは、他のブライス研究と比較して、鈴木大拙の禅理解を端初としている点である。難解を極めるとされるブライスの考え方も、ブライスが東洋の文化、宗教を学んだ時代に書いた英文の著作から見ると、おのずからなる展開と理解しうる。

本稿のもうひとつの特色はブライスの英文学理解を視野に入れている点である。ブライスは戦後の天皇の人間宣言英文版の起草者である点だけでも、また俳句の海外への紹介に大成功した第一人者としてだけでも研究テーマたりうるのであるが、彼の精神を考えると、英文学の世界こそ彼のホームタウンと言えるからである。

本稿の第三の特色は初期ブライス研究であるということである。ブライスは激動の昭和史を戦前は植民地朝鮮で16年、戦中は神戸の収容所で、戦後は英語英文学教授および皇太子の家庭教師としてすごした人である。日本の文化、宗教に対するブライスの見方もすべての時期で均一であるのではない。また、日本と日本人のものの考え方も戦前、戦中、戦後においては一様ではない。ここでは第一次大戦の兵役を拒否し、母国イギリスを去り、朝鮮の大学で教鞭をとっていたころの初期のブライス、ブライスの初心を研究対象としている。

### 1 京城時代における禅との出会い

R . H . ブライスは1898年イギリスのエセックス州に生まれ、ロンドン大学を卒業し、戦前は京城帝国大学、戦後は学習院大学、東京大学、日本大学、東京教育大学、早稲田大学、実践女子大学などで教

鞭をとっている<sup>1</sup>。平成天皇と皇后の英語教師を歴任し専攻は英語英文学、日本文化（禅・俳句）。没年は1964である。生涯と業績についての全般にわたる論考<sup>2</sup>には上田邦義、杉本京子ほかの研究がある。ここでは R.H.ブライスにおける禅と英詩の認識に焦点をあてて検証していく。

ブライスの禅との出会いは京城帝国大学に職を得て間もなくであったという。鈴木大拙の著書に啓発され、京城の寺院で参禅を始めている。1927（昭和2）に出版された鈴木大拙の *Essays in Zen Buddhism, First Series* を読み深く感動し、以来鈴木大拙の禅の熱烈な信奉者となった。1938年から京城の臨済宗妙心寺別院<sup>3</sup>で座禅を始めている。1938年鈴木大拙の *Zen Buddhism and Its Influence on Japanese Culture* が出版され、ブライスは大変影響を受けたという。<sup>4</sup>

ブライスはその著書『禅と英文学』ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS, The Hokuseido Press 1942の序文で次のように述べている。

I have asked and received no help from anyone in the writing of this book... However, my indebtedness to Taisetz<sup>5</sup> Suzuki's books on Zen will be apparent

<sup>1</sup> 柳田聖山監修『禅と文学』（叢書 禅と日本文化 4）ペリかん社 1997年 著者紹介

<sup>2</sup> 宗片邦義「R.H.ブライスの業績」『英語教育』1965年1月号、大修館

日本大学英文学会『英文学会会報 R.H.ブライス先生追悼特集』1966年

杉本京子「R.H.ブライスの禅について」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第3号 2003年  
上田邦義・氏家飄乎「R.H.ブライスの俳句観：芭蕉論」『融合文化研究』第4号 2004年

<sup>3</sup> 大正デモクラシー期以降の臨済宗の実践の中心に山本玄峰(1866-1961)がおり、1936年満州国新京に妙心寺別院を創建している。血盟団事件(1932)主犯井上日召は山本玄峰の下で修行しており、山本は裁判の証人として出廷している。

<sup>4</sup> 杉本京子「R.H.ブライスの禅について」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第3号 2003年より引用

<sup>5</sup> 鈴木大拙は私の見た文献はすべて、ブライス以外

to all; if I venture to criticize him, it is only biting the hand that fed me.

このように、ブライス本人が鈴木大拙からの影響を明記している。

京城帝国大学の学風はどのようなであったかについて、ある韓国人がつぎのような見解を述べている。

植民地朝鮮は、我々がしばしば想像するような深刻な思想統制の社会ではなかった。少なくとも朴大統領、全大統領のような馬鹿が国を治めた時代よりはもっと思想の自由が許容されていた時代だった。言わば、植民地朝鮮は韓国の現代史においては思想的ルネサンスのような時代だった。<sup>6</sup>

ブライスをとりまいていた城大内の雰囲気は自由闊達であり、本土よりも野心的かつ気宇壮大であったと推測される。なおかつ外国人であるブライスには英語での活動において日本人、朝鮮人以上の自由度が与えられていたであろう。

ここでブライスが禅を学び始めたころの禅宗教団を取り巻く情勢を見ておきたい。満州事変(1931年)以降の禅宗教団の歩みは戦争協力の歴史そのものである<sup>7</sup>。1940年の宗派合同政策によって臨済宗は一派に合同せられ、1941年には仏教連合会に参加、1944年にはあらゆる宗教を一元化した大日本戦時宗教報国会に参加。この状況下、禅宗においては「戦時教学」が展開され、山崎益州、杉本五郎により皇

「だいせつ」であって「たいせつ」ではない。岩波新書『禅と日本文化』はSUZUKI, DAISSETZ T. 大拙・鈴木貞太郎 *Zen Buddhism and its Influence on Japanese Culture* Kyoto 1938, The Eastern Buddhist Society, Otani Buddhist College の翻訳、となっている。ブライスは巻末の索引においても Suzuki, T. と表記している。上記引用の部分からわかるようにブライスは貞太郎のTではなく、大拙をたいせつと読んでいる。

<sup>6</sup> [http://members.at.infoseek.co.jp/koreawatcher/docs/45so\\_3003.htm](http://members.at.infoseek.co.jp/koreawatcher/docs/45so_3003.htm) (2004年12月23日) タンジ歴史考証チーム

<sup>7</sup> 伊吹敦『禅の歴史』法蔵館 2001年

道禅（天皇宗）が唱えられた。杉本五郎はその『大義』において「諸宗諸学を総合し、人類を救済し給うは、実に天皇御一神におわします」と説いている。

ブライスの『禅と英文学』<sup>8</sup>の出版は1942年である。1942年は1月6日陸海軍機1000機東京上空を示威飛行で始まり、2月には大東亜戦争戦捷第1次祝賀国民大会開催。酒、菓子など特配があったという。3月には日本出版文化協会が全出版物の発行承認制実施を決定。そのため神田書店街は買い漁りで繁昌。6月に日銀がタイ国大蔵省と2億円の借款供与に関する協定に調印。11月には大東亜文学者大会がひらかれ開会式には満・蒙・華代表も参加。12月3日から27日には第1回大東亜戦争美術展があり、藤田嗣治は<十二月八日の真珠湾>宮本三郎は<山下・パーシバル両司令官会見図>を出品。12月29日に『禅と英文学』が発行されている。

『禅と英文学』の冒頭にはつぎのように記されている。

#### PREFACE

Zen is the most precious possession of Asia. With its beginnings in India, development in China, and final practical application in Japan, it is today the strongest power in the world.

#### はしがき

禅はアジアで最も貴重な財産である。インドに起こり、中国で育ち、日本で究極の実用化をされた禅は、今日世界最強のパワーである。（私訳）

と述べているが、この文章はインド、中国をはじめとするアジアの共栄が意識され、それを導く日本に世界最強のパワーがあってほしいとする時代に刊行された。

## 2 ブライスのシェイクスピア理解<sup>9</sup>

<sup>8</sup> ブライスの著書『禅と英文学』の書名は1996年新装2刷の奥付においては日本語英語併記のZEN IN ENGLISH LITERATURE 禅と英文学であり、表紙にはZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS 禅と英文学 となっている。

<sup>9</sup> ブライスのシェイクスピアに対する関心を彼の著

ブライスの禅的認識は鈴木大拙の『楞伽經』<sup>10</sup>研究の線上に位置している<sup>10</sup>。『楞伽經』とは達磨が慧可<sup>えいか</sup>に伝授した經典である。不立文字の禅宗の始祖が經典を示すのは矛盾であるが、伝説、断臂<sup>だんぴ</sup>の故事によれば、教えを乞い慧可は庭で立ち尽くす。ひざまで雪に埋もれるまで待つが達磨は語ろうとしない。慧可は肘を切り落とし達磨に求道の誠を示した。そこで達磨は慧可に四巻の『楞伽經』を与えたという。『楞伽經』の主要なテーマのひとつに認識論がある。ブライスはシェイクスピアのものの見方に禅と同じ認識があるとしている。

To return to Shakespeare. In the Preface to *Bleak House*, Dickens quotes from one of the sonnets,

My nature is subdued

To what it works in, like the dyer's hand.

This is Shakespeare's Zen, his religion; his nature, his self, is subdued to what it works in, in men and women, in Nature, in all this mighty world of eye and ear.<sup>12</sup>

話をシェイクスピアにもどそう。『荒涼館』<sup>13</sup>の序文においてディケンズは『ソネット』の一節を引用している。

わたしの天性はひかえめで

染物師の手仕事のように織りなし

書『禅と英文学』における引用回数から見ると、ワーズワース(57回)、イエス(54回)、芭蕉(43回)、ウィリアム・ブレイク(27回)、孔子(21回)に対しシェイクスピアの引用は36回である。

<sup>10</sup> 4巻の『楞伽經』は難解とされ後世において2度大幅な再編集がおこなわれている。達磨の9年間の修行の座右にあったと推測できる。

<sup>11</sup> 慧可 隋代の僧。中国禅の第2祖。

<sup>12</sup> R. H. Blyth, *ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS*, The Hokuseido Press 『禅と英文学』 p.426

<sup>13</sup> Charles Dickens(1812-1870) *Bleak House* 1853

これがシェイクスピアの禅であり、宗教である。彼の性格、彼の自我は、男と女、大自然、耳目を驚かす全世界のなかに押し込められている。

ブライスの禅の理解の特色は禅の働きを詩の世界で見つめていることにある。ブライスのシェイクスピア理解の特色はシェイクスピア作品を正当に詩としてとらえていることである。禅の理解は人によって色合いを異にする。なぜ異なるのか。ひとつの要因としてその人の境涯がある。茶人の禅というものがあり、武人の禅というものがある。ブライスの場合は詩人の禅である。シェイクスピアの理解も、新劇の一種ととらえる人がいて、一方において推理小説と読む人<sup>14</sup>がいる。散文としてとらえる人が多い今日ではあるが、ブライスは韻文の世界でシェイクスピアをとらえている。その視座においてブライスはシェイクスピアに禅味ありとするのである。

ここでシェイクスピア悲劇についてブライスの説を見ていく。

‘Will you walk out of the air, my Lord?’  
‘Into my grave.’

ブライスは『ハムレット』第2幕第2場のハムレットとポローニアスの会話を引用<sup>15</sup>している。ポローニアスが「ハムレット様、外気はお体に障ります。おはいりになっては」と問うと、ハムレットは「自分の墓穴にな」と答え、このあとポローニアスは慇懃に一礼して去り、ハムレットは「憎いやつだ、耄碌爺」と叫ぶ。それぞれシェイクスピアの手によって、ポローニアスはポローニアスらしく、ハムレットはハムレットらしく織り上げられる。シェイクスピア自身の価値判断の押しつけはない。ブライスはそこに、シェイクスピアの控えめで透徹した認識のあり方をとらえ、そのような認識のしかたこそ禅であるという。

<sup>14</sup> 田中重弘『シェイクスピアは推理作家』文藝春秋社 1982年

<sup>15</sup> 前出 R. H. Blyth, p.426

Why should a dog, a horse, a rat, have life,  
And thou no breath at all? Thou'lt come no more,  
Never, never, never, never, never!

ブライスは『リア王』第5幕第3場、リアが半狂乱の体で死んだコーディーリアを両手で抱きかかえつつ登場した場面を引用している。「犬や馬や鼠でも命は持っているのに、なぜ息がないのだ。もう帰ってこない。決して、決して……」リアは死骸を地上におろし、そばに跪く。末娘の死に臨んでのリアの言葉である。

上記3行の引用の後ブライスは

... in such passages we see the Zen of Shakespeare, the thing as it is, the world as it is. While we also are immersed in such states of Mind<sup>16</sup>, all the dogmas of religion and rules of morality dissolve away in the stream of life.<sup>17</sup>

このような一節に、あるがままにものを見る、あるがままに世界を見るシェイクスピアの禅がある。われわれもそのような「大智」の境涯に達すれば、宗教的な教条や道徳的な約束事などはすべて生の流れの中に溶け去るのである。

と語っている。コーディーリア臨死において流し去られた宗教的教条、約束事とはどのようなもので

<sup>16</sup> mind の大文字Mと小文字mが区別される場合というのは、黄檗禅師の『伝心法要』の英訳に出てくると推定できる。

問。昔から誰もが「即心是仏」と申しておりますが、どのような心そのものが仏なのでしょう。

答。お前にはいくつの心があるかな。

問。凡心(mind)そのものが仏でしょうか。聖心(Mind)そのものが仏でしょうか。

答。一体おまえのどこに凡聖の心があるというのだ。

問。三乗の教えのなかに聖と凡があると説かれています。

答。三乗のなかに「聖凡の心は妄である」と。

入矢義高「禅語つれづれ」『叢書 禅と日本文化』第4巻 柳田聖山編集 ペリかん社 1997年

<sup>17</sup> R. H. Blyth, *ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS*, The Hokuseido Press 1942 p.427

あろうか。

シェイクスピア作品の宗教性について

For Shakespeare, in the matter of religion, the choice lay between Christianity and nothing. He chose nothing.

George Santayana : *Poetry and Religion*<sup>18</sup>

シェイクスピアには宗教性皆無とする説があり、ブライスはそれを否定する。この場面でキリスト教的約束事は流し去られているが、宗教性は厳然と存在する。シェイクスピアの認識は曇りのない鏡のようであり、その認識のあり方は禅そのものであるというのがブライスの説である。コーディーリア臨死において流し去られた宗教的教条、約束事、死に臨む状況での宗教的な教義を見ておこう。

カトリック的見解では、復活が想われねばならない。

死者の復活を信じることは、教会の初めからキリスト者の信仰の本質的要素の一つでした。

「死者の復活、というキリスト者の信念、この信仰によってこそわたしたちは生きているのです」<sup>19</sup>

「からだの復活を信じます」が正当な見解であろう。死者は永遠のいのちを得て、神のもとへ旅立つ。キリスト教の葬儀<sup>20</sup>での歌は、たとえ死んでも、お互いに離れることはなく、再会がある、との意味であるという。シェイクスピアはリアに復活を否定する発言を一度ならずさせている。ブライスはそこにシェイクスピアの宗教性を見出す。あるがままに見る認識の提示は聖なる次元の入口でもあるのだ。

<sup>18</sup> 同書 p.425

<sup>19</sup> テルトゥリアヌス『死者の復活について』  
Tertullianus, *De resurrectione mortuorum* 1,1: CCL 2,921 PL 2,841

<sup>20</sup> 日本カトリック司教協議会教理委員会監修『カトリック教会のカテキズム』カトリック中央協議会 2002 年

### 3 ブライスの禅

ブライスはその著書『禅と英文学』『俳句』で禅について次の(1)(2)(3)のように言及している。

(1) The life of Zen is the God-kissed life. (p.261)

禅による生活は神に接吻される生活であるとするブライスの見解は禅の世界ではどう位置づけられるのであろうか。伊藤英三<sup>21</sup>は「禅宗を知ろうとするに当たり、二三の主要の人々の教法を研究するだけではその一部分を知るに過ぎないのであって、禅の全貌を知るには出来るだけ多数の教法を知らねばならない」としている。そうであるとなると、ブライスの禅理解を吟味することは一朝一夕にはできない。

(2) All beauty, all music, all religion, all poetry, is a dancing of the mind. Without this dancing of the spirit there is no true Zen. (p.35)

すべての美、すべての音楽、すべての宗教、すべての詩は心の踊りである。精神が踊っていないなら本当の禅とは言えない。日本人の常識からすると、ブライスの禅理解はユニークな禅理解と映る。現代の平均的日本人が日常生活で出会う禅宗には踊りだしたくなるような要素はない。禅宗もひとつの社会的関係であり、社会生活の一部である。世襲の禅僧が経を読み、布施を受け取って帰る。礼を尽くして僧をもてなすにしても、内面に詩的感興を伴うものではない。

(3) I understand Zen and poetry to be practically synonyms. *HAIKU* <sup>22</sup> (p.7)

ブライスは禅と詩的感興はほとんど同意語も同然と理解している。禅の論法を用いるなら、禅と詩は同義語である。そして詩と禅は反意語である。

<sup>21</sup> 伊藤英三『禅』弘文堂 1955 年

<sup>22</sup> R.H.Blyth *HAIKU* Vol.1 The Hokuseido Press 1981

文学と禅の関係は婆子焼庵。ある婆さんが20年も、青年僧を供養する。若い娘に給仕させて、至れり尽くせりのサービス。最後に娘に言い含めて、青年僧に抱きつかせ、ご気分はと問う。「枯木寒山によって三冬暖気無し」。婆さんは青年僧を追い出し、草庵を焼きはらう。

禅門の公案「婆子焼庵」である。ここに見られるように、禅と文学的なものの間には対立的緊張が漂っている。そこを同義語とするところにプライスの禅がある。プライスの詩と禅なる用語を詩精神と禅精神と解すれば容易に理解でき何の問題もない。なぜ戦後欧米に“Zen”ブームが起こったか。舞踏・舞踊・躍動精神、教義や道徳や定義を突き破ろうとする生き生きした精神の故ではないか。大拙の禅にその泉源を求めたい。

#### 4 鈴木大拙の禅

小堀宗柏<sup>23</sup>は鈴木大拙の学問上の主著を梵文の『楞伽經』の英訳であるとする。『楞伽經』<sup>24</sup>の世界に鈴木大拙の禅がある。『楞伽經』とは達磨が弟子の慧可に与えた經典である。鈴木大拙は、中国の禅宗の始祖であり、インド人である達磨に立ち返り、インド人も中国人も日本人も共有しうるアジアを一つにする思考の形を模索している。『楞伽經』は中国仏教の始原に位置するがゆえに中国仏教の影響下に成立した日本仏教諸派の考え方を包摂しうる。鈴木大拙は雄大な構想をもって『楞伽經』研究に取り組んだと考えられる。大拙が日本の仏教を代表し、国際的に活躍しえた土台に彼の『楞伽經』研究がある。

禅宗は不立文字であるから、達磨も大拙も『楞伽經』の一語一句に拘泥するわけではない。なおかつ『楞伽經』は蘇東坡も「文字簡古」「読者或は句する能はず」と評した如く本場中国人にも解りにくい。大拙自身も『楞伽經』前序において「自分が此經の研究を心がけてから多少の月日を経過したが、まだ

思うようなことが出来ぬ。この先何年かかるかわからぬ。執筆まで何度躊躇したかわからぬ<sup>25</sup>」と語っている。しかし本文では明快に『楞伽』全經の大眼目は<sup>26</sup>自證聖智の境界であると説いている。

大拙の『楞伽經』<sup>27</sup>自證聖智の境界を我流に要約すると下記の如くなる。

大乘の修行のめあては自證聖智の境に入ることである。真理を認識し悟りを開く。そのためには座禅をして閑静幽寂な境地に身をおき、心の動く様子を注意深く尋ねる。そこから自覚が生まれる。内から働き出す知的経験、これである。その働きによって妄分別、執着を超越する。この境地から慈悲心が生じてくる。

鈴木大拙の禅はインド人中国人日本人の禅理解の共通項であり、そこにプライスはシェイクスピアの認識につながる透徹したものの見方を見出している。

さらに、鈴木大拙のアメリカでの公演、出版の内容は禅3割、日本文化7割である。北川桃雄訳『禅と日本文化』<sup>28</sup>においても禅それ自体の説明は数ページであって茶道、剣道、俳句などの項目に即し禅の説明がされてゆく。それを外国人は全体が禅の説明とうけとるようである。プライスも俳句等日本文化に禅を見ている。または、日常への応用こそ日本の禅であるとしている。

プライスの禅理解は文学的であるが、鈴木大拙の言説にそれを誘う要素が含まれているのである。

#### 結論 先覚者としてのプライス

プライスは『禅と英文学』の第1章「禅とは何か」において禅の説明として鴨長明、道元、ゲーテ、聖書などを引用し、論語の引用で章を終えている。これは今日的には諸思潮の錯綜、雑居ととれるのだが、出版当時の時期の、諸宗諸学を総合し人類を救済しようとする時代精神の反映であると考えられる。

<sup>23</sup> 鈴木大拙『禅による生活』鈴木大拙禅選集3 春秋社1960年 解説参照

<sup>24</sup> 鈴木大拙『楞伽經』『鈴木大拙全集』第5巻岩波書店1968年

<sup>25</sup> 前掲書 p.462

<sup>26</sup> 前掲書 p.497

<sup>27</sup> 前掲書 p.497

<sup>28</sup> 鈴木大拙著 北川桃雄訳『禅と日本文化』岩波書店1940年

なおかつ、儒学を禅と峻別しようとする今日の感覚は普遍的なものではない。室町時代には禅僧が儒学の新しいとらえ方を大陸から伝えているのである。ブライスの論語解釈には江戸時代以前の論語の読み方が閃いている。そこには論語の新しい読み方を切り拓く可能性がある。孔子はよい音楽にふれ3ヶ月間肉の味がわからなかった、それほど感動したという記述<sup>29</sup>とか、「詩に興り、礼に立ち、楽に成る」教養の完成を音楽に求めている部分は現代の平均的日本人の論語観では説明しにくい。

ブライスの見解は未来志向であり、日本人の自国文化への無自覚かつ因習的理解とは対比的であって示唆に富むものである。

禅のあり方についても、明治大正昭和の禅は男文化、男たちの最後の砦というとらえ方がある。その対極にブライスの「すべての美、すべての音楽、すべての宗教、すべての詩は心の踊りである。精神が踊っていないなら本当の禅とは言えない。」という新鮮な悟りがある。

21世紀の社会が女男平等社会を志向し、国際化が進むとするならば、神に祝福される、楽しげなブライスの禅は明日の文化への最初の砦であると言って差し支えないであろう。

### R. H. ブライス研究 文献リスト

- ( 1 ) R. H. Blyth, *ZEN IN ENGLISH LITERATURE AND ORIENTAL CLASSICS*, The Hokuseido Press 1942
- ( 2 ) R. H. Blyth *HAIKU* 4 Vols, The Hokuseido Press 1949-52
- ( 3 ) R. H. Blyth, *Selections from Thoreau's Journals* with introduction and notes by R. H. Blyth, Tokyo : Daigakusyōrin, 1949
- ( 4 ) R. H. Blyth, *A Short History of English Literature*, Nan'un-do, 1953.
- ( 5 ) R・H・ブライス著 R・K生訳「詩とは何か」『心』第12巻第11号、平凡社、1959年11月
- ( 6 ) R. H. Blyth, *Japanese Life and Character in Senryu*, The Hokuseido Press, 1960
- ( 7 ) R. H. Blyth, *Edo Satirical Verse Anthologies*, The Hokuseido Press, c1961
- ( 8 ) R. H. Blyth, *A History of Haiku*, The Hokuseido Press, 1963-1964
- ( 9 ) 宗片邦義「R.H.ブライスの業績」『英語教育』1965年1月号、大修館
- ( 10 ) 日本大学英文学会『英文学会会報—R.H.ブライス先生追悼特集』1966年
- ( 11 ) R. H. Blyth, *Zen and Zen Classics* vol.4 東京北星堂 1966
- ( 12 ) 平田高士『無門関』筑摩書房 1969年
- ( 13 ) Kuniyoshi MUNAKATA, "R. H. Blyth Bibliography", *Reports of the Department for Liberal Arts, Shizuoka University* (Vol.8) March, 1973
- ( 14 ) 宗片邦義「ヘンリー・ソーロウとR.H.ブライス」『ヘンリー・ソーロウ協会会報』1976年9月
- ( 15 ) Mallory Fromm, "R. H. Blyth: A Brief Biography and Appraisal", 『津田塾大学紀要』1983
- ( 16 ) 川島保良編『回想のブライス』回想のブライス会刊行会 1984.
- ( 17 ) 白米満行「R.H.ブライスの人と業績」( 1 )『皇學館論叢』第20巻第6号、1987
- ( 18 ) 白米満行「R.H.ブライスの人と業績」( 2 )『皇學館論叢』第21巻第3号、1987
- ( 19 ) R. H. Blyth, Edited by Kuniyoshi Munakata and Michael Guest, *ESSENTIALLY ORIENTAL*, The Hokuseido Press, 1994
- ( 20 ) 吉村脩久代「R・H・ブライスのルネサンス」『松ヶ岡文庫研究年報』第9号松ヶ岡文庫 1995年
- ( 21 ) 吉村脩久代著『R・H・ブライスの生涯：禅と俳句を愛して』同朋舎出版、1996年
- ( 22 ) 吉村脩久代「アメリカ禅俳句の一系譜—R.H.BlythとJames W. Hackett」『東海英米文学』第6号、東海英米文学会 1997年
- ( 23 ) R・H・ブライス著 宗片邦義訳「禅と英文学 俳句をどう読むか」柳田聖山編集『禅と文学』(禅と日本文化：叢書；4). ペリかん社、

<sup>29</sup> 『論語』述而第七 三月不知肉味

1997 年

- ( 24 ) Ikuyo Yoshimura, “R. H. Blyth and American Haiku — R. H. Blyth and, James W. Hackett, and Richard Wright”, 『朝日大学一般教育紀要』第 7 号、朝日大学、2001
- ( 25 ) 杉本京子「R.H.BLYTH の研究 —— ブライスの分かりにくさについて」『融合文化研究』第 1 号 2002 年
- ( 26 ) 杉本京子「R.H.ブライスの禅について」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』第 3 号 2003 年
- ( 27 ) 上田邦義・氏家飄乎「R . H . ブライスの俳句観：芭蕉論」『融合文化研究』第 4 号 2004 年
- (28) <http://www.gardendigest.com/zen/blyth.htm>, Prepared by Michael P. Garofalo ,March 3, 2003
- (29) <http://www.worldhaikureview.org/1-3/haikunews/kamaginko2.shtml> Tomb of Reginald Horace Blyth (1898 -1964) Photography by Museki Abe, Tokyo, JP